キルギス共和国チュイ州北部における都市と農村の拡大に関する人文地理学的研究

筒　井　　裕※

※帝京大学文学部史学科

はじめに
Ⅰ．首都近郊における都市化の進展
Ⅱ．農村における都市化の進展
Ⅲ．ドンガン系による農村集落の急速な拡大
おわりに

はじめに

キルギス共和国は中央アジアの東部に位置し、チュイ、イシク・クル、ナリン、タラス、ジャララバード、オシュ、バトケンの７州からなる人口約614万人（2017年）の国である（図１）[1]。その国境はカザフスタン・中国・タジキスタン・ウズベキスタンと接しており、古くより、上記の国々とともにシルクロードの要衝として栄えたことで名高い。シルクロードを軸とした長期間におよぶ東西の人々や文物の交流は、キルギスの地に非常に複雑な文化と民族構成をもたらした。さらに20世紀前半に同地域がソ連の構成共和国に編入されると、数多のロシア系が都市部へ入植し、民族構成・分布をより複雑なものにした。その後、1991年のソ連崩壊にともない、この地域は「キルギス共和国」として独立し[2]、資本主義経済の導入に踏み切ったが、文化人類学者の吉田世津子が報告したように、キルギスの国民たちは様々な社会的・経済的な問題に直面することとなった[3]。

以上記した複雑な歴史的背景をもつがゆえに、現在のキルギスは確認し得るだけでも80前後の民族が居住する多民族国家となっている（1991～2009年実施の国勢調査による）[4]。ただし、2013年現在、これらの中でもキルギス系が全人口の 72.4% を占め、国内最大の民族集団としての位置づけにあり、これ

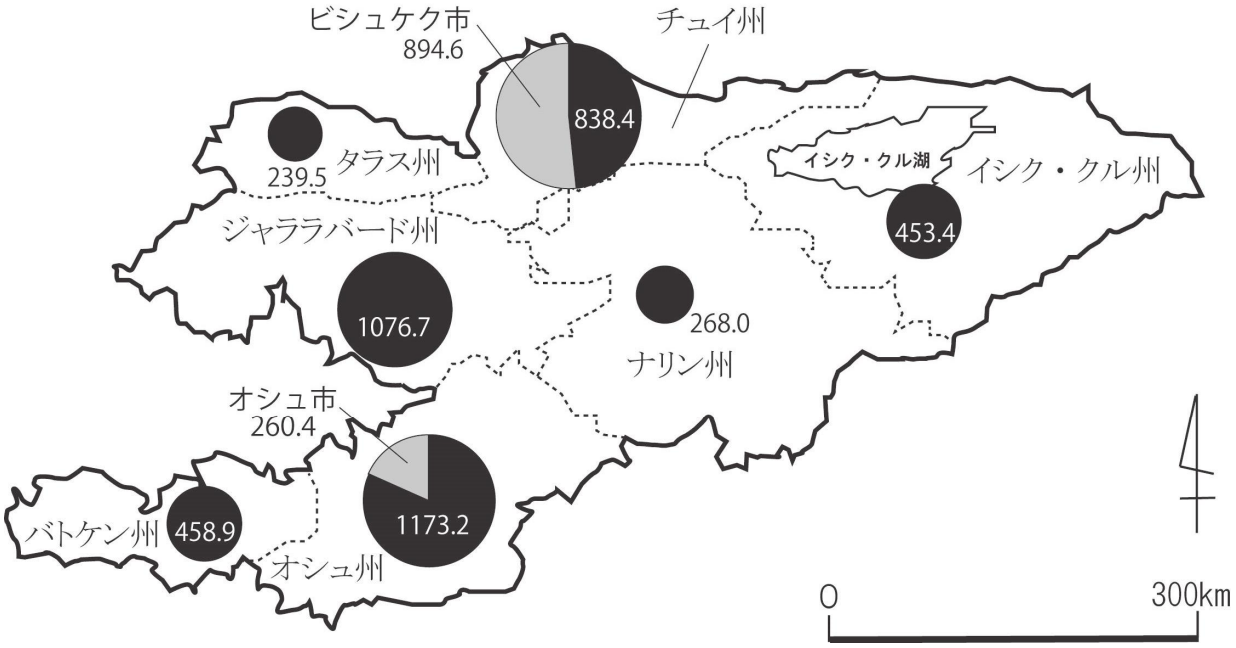

図１．キルギスの各州の位置と人口（2013年）
（Department of the Main Computing Center of the National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic, ed.（2014）をもとに作成）　単位は 1,000 人

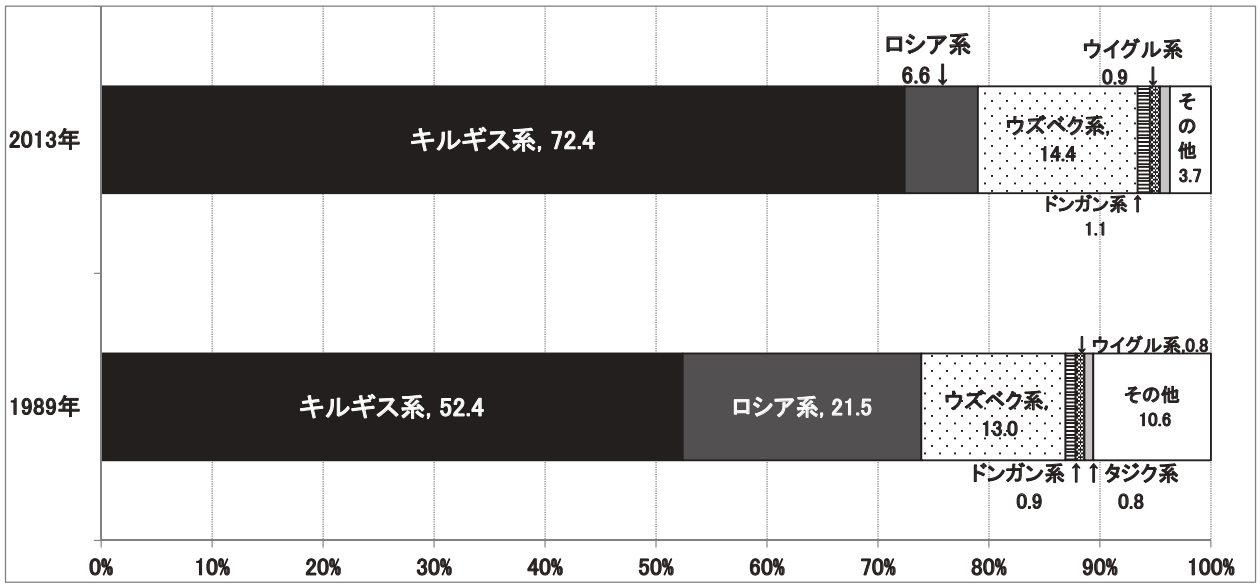

図２．キルギスにおける主な民族の割合（1989～2013年）
（Department of the Main Computing Center of the National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic, ed.（2014）、ならびに National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic の HP 掲載の統計資料 Total population by nationality：assessment at the beginning of the year, people をもとに作成）

にウズベク系（14.4％）、ロシア系（6.6％）、中国にルーツをもつドンガン系（1.1％）、そしてウイグル系（0.9％）などが続く（図２）[5]。

19世紀末以降、世界のイスラム教徒の人口は急増傾向にある。早瀬・小島編（2013）によると、19世紀末の段階においてイスラム教徒は世界の全人口の約10％に過ぎなかったが、2050年にはその割合がおよそ25.0％にまで上昇する見込みだという。この要因として、国を問わず、イスラム教徒の女性たちの平均初婚年齢・平均性交開始年齢が、仏教徒・キリスト教徒のものに比べて若い点を指摘できる（早瀬・小島編：2013）。したがって、近い将来、イスラム教徒が世界的に、また地域社会により大きな影響を及ぼす存在となることは明らかで、イスラム圏の社会をテーマにした研究の蓄積が今以上に求められると言えよう。

2018年現在、全国民の４分の３がイスラム教徒で占められるキルギスにおいても人口は増加傾向にある。同国の人口は1960年当時で約217万人であったが（世界銀行による）、その約60年後の2017年には３倍近くの614万人にまで増加した。様々存在するキルギスの民族集団の中で、人口増加の牽引役となっているのが、国内最大の民族集団であるキルギス系と少数派のドンガン系である。両者はおもにイスラム教を信仰しており[6]、それぞれの合計特殊出生率は前者が2.3、後者が2.5となっているが、後者は数十にも及ぶ民族集団の中でも最大値を誇る（2009年）[7]。ちなみに、イスラム教を信仰するキルギス系以外のテュルク系の合計特殊出生率はいずれも2.0～2.3の値をとることから（2009年）[8]、これらは人口をほぼ一定に維持した状態にあるか、あるいは人口を増加させている状態にあるものと推測される（図３）。

以上述べたように、キルギスは人口増加の最中にあるが、これと並行して、1991年のソ連崩壊以降、同国の農村から国内外へ数多の人々が移住するようになり、これが深刻な社会問題のひとつになっている。この移民の流れをつくりあげた要因のひとつは、キルギス国内における南北の経済的格差である。先に紹介した吉田世津子によると、チュイ州を含むキルギス北部は比較的乾燥に強い小麦や果樹の栽培、牧畜、電気・機械類の製造、金属加工業が盛んで、国内における農工業の中心的地域になっている[9]。これに対し、同国南部の基幹産業は牧畜を主軸とした農業だが、この地域では経済活動が停滞しており、人々の平均所得は相対的に少ない（吉田：2004）。吉田と同様に中島（2010）も、キルギスを「工業的に発展した（首都）ビシケクを中心とする「北部」、そして「産業が立ち遅れ、イスラーム的な慣習が強く残る南部」」と南北間に経済的格差があることを指摘している（（　）内は筆者による）。吉田（2004）や中島（2010）が示したキルギス国内における経済・

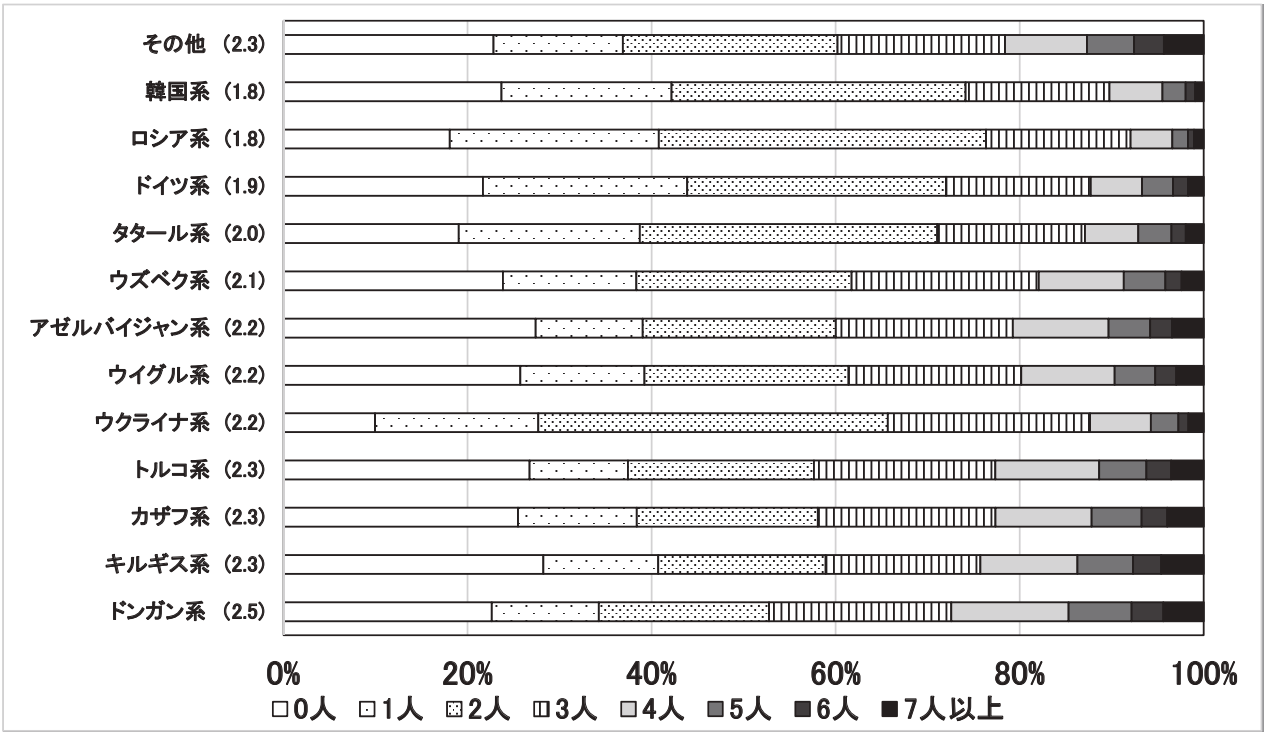

図３．チュイ州における各民族の女性１人あたりの子供の数とその割合（2009 年）
（National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic, ed.（2009）をもとに作成）
注）縦軸の（　）中の数値は合計特殊出生率である。

産業の発展状況の地域差を反映するように、資本主義経済の導入後、人口増加に喘ぎ、就業の機会に乏しいキルギスの農村の人々―とりわけ南部の農村出身者―は現金収入を得るべく、ロシアやカザフスタンの大都市、あるいはチュイ州内の首都ビシュケクとその近郊を目指したのである。

キルギスとロシア・中央アジア間における国際的な移民の動向に注目した代表的な研究のひとつに、堀江編（2010）がある。堀江編（2010）は、2008年に中央アジア諸国からロシアへ少なくとも26万人もの移民が渡った点や、彼らが移民先で不法滞在・人身売買・警官らによる賄賂の要求などの様々な社会問題に直面していることを浮き彫りにした。また、Schuler（2007）は統計資料を分析し、20世紀のキルギス国内外における人口移動の概要を比較的マクロな視点で明らかにした。Schuler が指摘するように、ソ連崩壊以降、首都を抱えるキルギス北部は国内各地の農村から人口を継続的に吸引してきた。その結果、首都の都市化は著しく進展し、2017年現在、ビシュケクは人口98万人を有する国内最大の巨大な都市へと成長した[10]（写真１・２）。

以上、キルギスを起点とした移民の動向に焦点を当てた先行研究を紹介した。しかし、これらの研究では20世紀以降の同国における人口の増加･移動が、首都とその近郊の土地利用にいかなる影響を及ぼしたかについて検討することはなかった。また、ソ連崩壊以降､チュイ州北部の首都近郊と農村において、どのような過程を経て都市化が進展したかに関する分析も行っていない。本稿ではこれらの点を解明すべく、首都を含むチュイ州北部を研究対象地域とし、次の方法で研究を進めた。最初に、1930・1960年代発行の10万分の１地形図、1960～2010年代撮影の衛星画像を分析し、20～21世紀における首都とその近郊の土地利用の変化を把握し、都市化がどのように進展したかについて長期的な視野での解明を試みた。また、首都近郊において住民を対象に聞き取り調査を行い、ソ連崩壊以降の同地域で都市化がいかに進展したか把握した。さらに、キルギス系、あるいはドンガン系が卓越する２つの農村でも住民に聞き取りを行い、これらの都市化の進展状況の特徴を明らかにした[11]。

Ⅰ．首都近郊における都市化の進展

１．都市化の過程と土地利用の変化

本節では、1938年・1964年にソ連軍が作成した縮尺

写真１．首都ビシュケクの市街地（2018年、筆者撮影）

写真２．高層化が進む首都ビシュケク
（2018年、筆者撮影）

10万分の１地形図と1968～1969年撮影のCORONA衛星画像、そして2005～2019年撮影の Google Earth の衛星画像を基礎的資料として、1930年代以降の首都（旧名フルンゼ）とその近郊における土地利用の変化を把握することにより、同地域で都市化がどのように進展したか検討を行う[12]。

筆者がこれらの地図・衛星画像を分析したところ、1930年代のフルンゼの市街地が南北約 3㎞、東西約 5㎞の面積を有する狭小なものに過ぎず（以下、この範囲を「旧市街地」とよぶ。図4-a）、農村集落がその北側では比較的密に、同じく南側においては疎らに分布していたことが判明した。現地での聞き取り調査によると、旧ソ連時代、首都の南側の地域は断層が存在することを理由に、住宅地としての開発・使用が禁止されていたという。また、図4-a の南側に位置する山間部から北側に向けて無数の小さなストリームが流れており、これらの一部が旧市街地の北東で合流して大規模な湿地・湖沼を形成していた。このように水資源の入手が比較的容易な環境下にあったことから、緑地が旧市街地と東西方向に延びる幹線道路沿いに形成された。さらに図4-a をみると、旧市街地の北東や南側に位置する山間部に牧草地が広がっており、当時、人々が首都近郊で遊牧を営んでいたことが垣間みえる。

Dyldaev（2017）によると、1941～1942年に灌漑用運河の造成や、軍需工場を含む約30にも及ぶ工場の移設がなされ、フルンゼでは産業が振興し、都市化が進展した。その結果、同地域では土地利用の在り方が大きく変化した。図4-b は、1960年代のフルンゼとその近郊の土地利用の様子を示したものである。同図から、① 1960年代当時、市街地が旧市街地の西・南・東側へと延伸し、都市空間が南北約 10㎞、東西 12㎞にまで拡大したこと、② 1960年代の段階で、牧草地が首都とその近郊でほとんど確認できなくなった（描写されなくなった）一方で、果樹園の面積が急増した事実から、首都近郊の農地の土地利用が牧畜から果樹栽培へ転換したと推測されること、③首都とその近郊の集落を結ぶ道路網が発達し、これらに沿って緑化が進んだこと、④運河・用水の整備が進み、水資源が市街地や周辺集落へと効率的に配送されるようになり、その影響で首都の北東にあった湿地・湖沼の面積が激減したことなどが把握できる。

次に、1960年代と2019年撮影の衛星画像を比較し、首都がどのように拡大したか確認する（図５）。図５をみると、この約半世紀の間に、首都が旧市街地を中核として、とくに南北方向へと市街地を延伸させたことがわかる。これに加え、筆者が 2016～2018年に実施した現地調査から、この10年間でビシュケク―トクマク（ビシュケクから東に約 60㎞）を結ぶ幹線道路沿いとその周辺、および、ビシュケク南西部において家屋の建設ラッシュが続いていることが明らかになった。たとえば、2018 年５月の時点で、多くのキルギス南部出身者がビシュケク南西部で家屋の建設を進めており、そこでは木材・パイプ類などの建築用材を載せた彼らの自家用車が道路を頻繁に往来していた（写真３）[13]。

２．首都近郊ノヴァパクロフカにおける急速な都市化

1991年のソ連崩壊以降、キルギスの首都近郊ではどのように都市化が進行したのか。筆者は首都から幹線道路沿いに約 15㎞東に離れたノヴァパクロフ

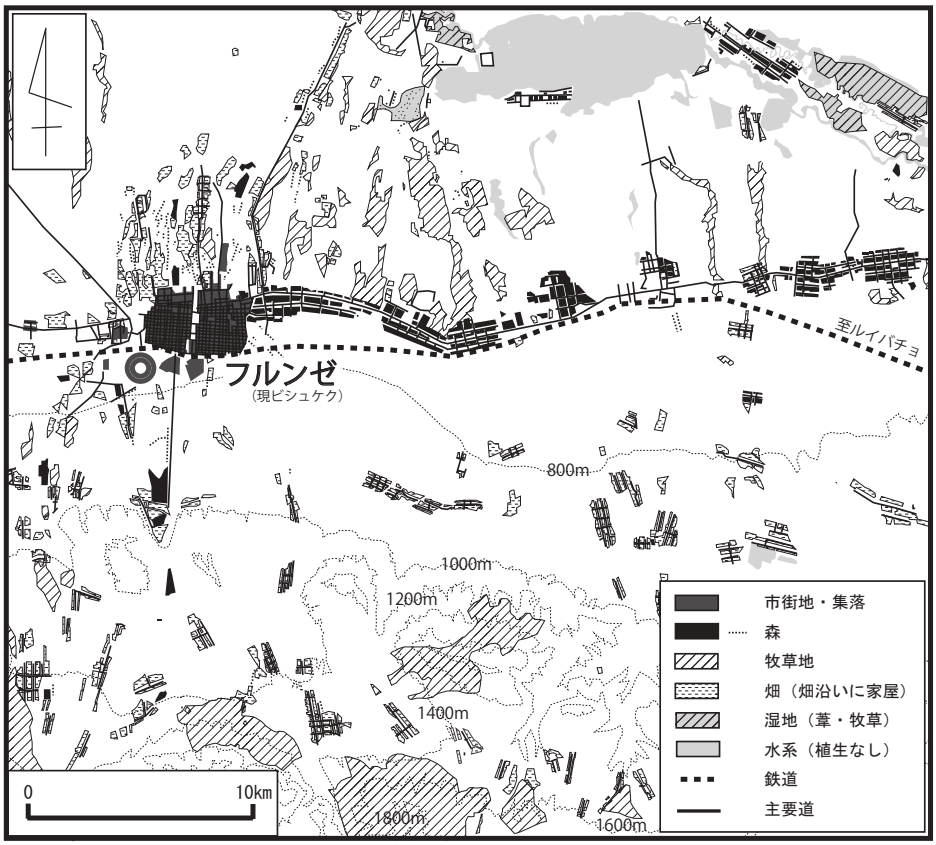

図4-a.　フルンゼとその周辺地域における土地利用（1930年代）

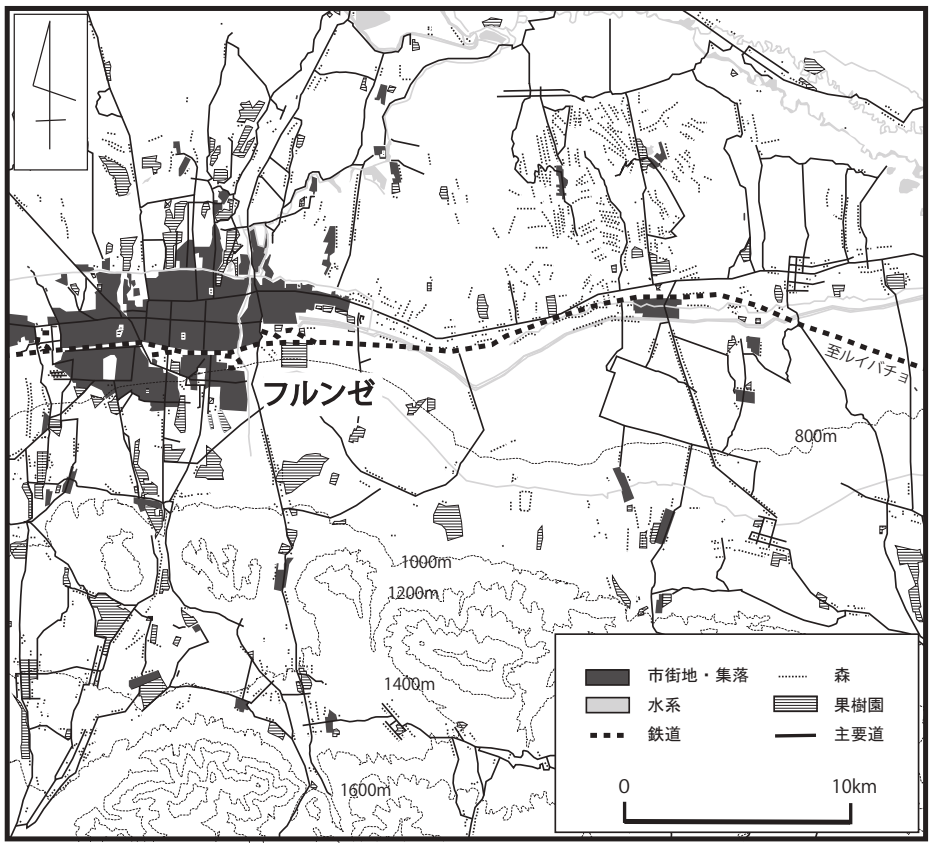

図4-b.　フルンゼとその周辺地域における土地利用（1960年代）
（1930年代・1960年代発行の10万分の１地形図「フルンゼ」をもとに作成）
注）Department of the Army ed.（1958）を参照した。

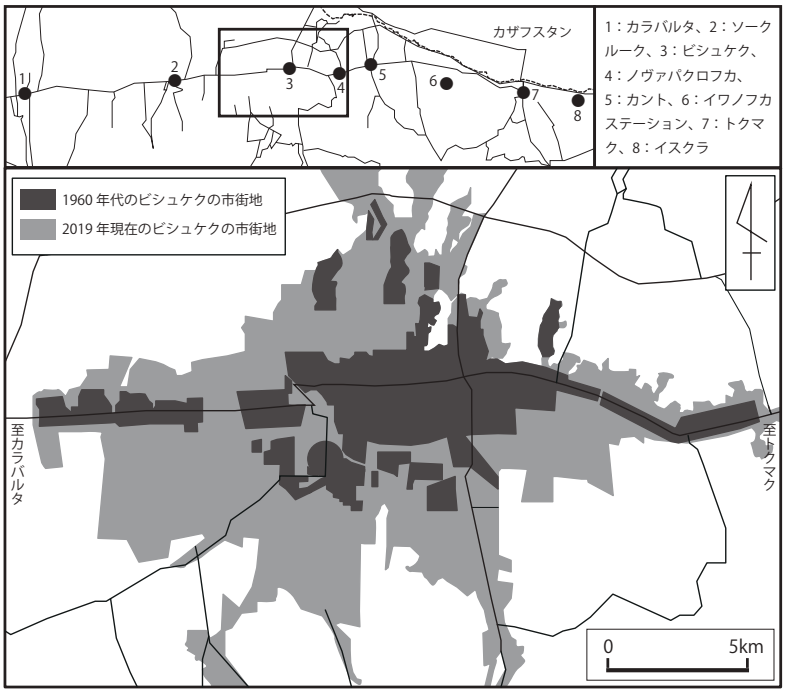

図５．首都における市街地の拡大（1960年代～2019年）
（1968年・1969年撮影のCORONA衛星画像、ならびに2019年撮影の Google Earth の画像をもとに作成）
注）本図の描写範囲は、割図中の□で囲んだ地域に該当する。

写真３．ビシュケク南西部の建設中の家屋
（2018年、筆者撮影）

カ（人口 14,026人、2017年）に注目した[14]。ノヴァパクロフカは、行政上、ビシュケクに属さないが、両地域の間には家屋・商業施設が連なっており、都市としての機能･景観が一体化した状態となっている。そのため、ヴァパクロフカの住民たちは「ここはビシュケクの一部だ」と認識する傾向にある（キルギス国立科学アカデミー所属の研究者による）。筆者はノヴァパクロフカにおいて住民たちにライフヒストリー、現住所に移住した時期と理由、首都を含む他地域への移住の計画などについて尋ね、上記の点の解明を試みた。以下に、聞き取り調査の結果の概要を掲げる（事例１～４）。

【事例１】ロシア系の60歳女性Ａ氏、旧ソ連ヤクーツク出身

両親はヤクーツクの出身で、タングステンなどを産出する鉱山で働いていた。両親はヤクーツクの寒冷さを嫌い、話者が２歳の時に温かいノヴァパクロフカへの移住を決意し、定着した。このため、話者は「生まれ育ったこの地を故郷だと感じている」と話す。話者の父親は友人たちにこの地域の気候のよさ、食糧の豊富さを伝え、こちらに移住するよう勧めた。ａ話者が記憶する限りでは、かつて、ノヴァパクロフカの主な住民はロシア系・ドイツ系で、キルギス系はあまり住んでいなかった。話者の両親がノヴァパクロフカに移住してから、母親は根菜の栽培（後に郵便局に勤務）、父親は大工をして生計を立てた。ｂ話者は、近年、経済力をつけた若いキルギス系が、この周辺に増えてきたと感じていると話す。ｃソ連が崩壊した頃は、この地域から東の方角には野原が広がっていたに過ぎなかった。当時、買い物をするにはノヴァパクロフカの中心部にある１軒しかないバザールに行かなければならず、苦労したという。ソ連崩壊以降は話者の自宅の近所にも店

ができ、日々の買い物が楽になった。d現在、この集落に居住していた多くのロシア系は母国に帰還してしまい、話者はそのことについて寂しく感じている。また、ロシアへ帰還した知人の中にはキルギスに戻りたいと希望する者もあるが、経済面や年齢のことを考えると容易に移住できない状態にあるという。話者の自宅の近所にはバルカル系･キルギス系･ドイツ系・ロシア系の人々が住んでおり、話者は彼らと日常的に仲良く交流していると話す。冬季になると話者の自宅前にイスとテーブルを置き、彼らとパーティを開くこともある[15]。現在、話者の自宅の東側は空き地になっているが、そこは国有地で、学校などの重要な施設が建設されるのではないかという専らの噂である。「もし、この土地が国有地でなければ、今頃、多数の住宅が既に建設されていることでしょう」と話者は語る。実際に、空き地の東側にある非国有地では多数の家屋が建設中であった（写真４）。現在、話者の自宅には水道・電気が通っているが､ガスについては輸送管の延長作業中のため、まだ到達していない。

【事例２】キルギス系の52歳女性Ｂ氏､ジャララバード州出身

話者は４人きょうだいで、現在の家族は自身と娘２人（うち１人は既婚）である。ジャララバード州の実家では遊牧を営んでいた。a話者は旧ソ連時代の11年間、故郷の国営の店で販売員として働いたが、35歳の時（2000年頃）にモスクワまで出稼ぎに行った。しかし、モスクワの寒冷な気候と狭い居住空間に辟易し、滞在10日間で帰国した。bその当時、話者の友人がノヴァパクロフカで働いていたことから、彼女自身もこの地への移住を決意したという。話者は移住を決断したもうひとつの理由を、この集落が、交通量が非常に多い幹線道路レーニン通り（集落の東側で幹線道路A-365と合流）沿いに位置しており、「ここで商売をすれば十分生活ができる」と考えたからだと話す。c移住後、話者はノヴァパクロフカでバザールを経営し（写真５）、そこで得た利益をもとに自宅を新築し、車を１台購入した。さらに娘のために他集落に家を建てたという。d話者がノヴァパクロフカに移住した当時、この地にはほとんど商店がなく、話者の店が「ノヴァパクロフカの最初の店のようなもの」で、この店舗がある地点から道路３本先の東側の地域は「建物も何もない」殺風景な場所だった。eまた､その当時、同集落に住むキルギス系の人口はごくわずかで、話者はその人口について「５～６名程度だったのではないか」と話す。f話者がノヴァパクロフカに家を構えると、彼女のきょうだいの子供たちが職探しのために話者を頼って上京し、半年～１年間ほど、話者宅に同居することもあるという。話者の親類の中にビシュケクとその近郊（ノヴァパクロフカ以外の集落）に移住した者がいるが、彼らにとって「首都やその近郊に自宅を購入し､住むことが人生の目標」になっていることから、帰郷の意思は微塵もないという。

写真４．ノヴァパクロフカの建設中の家屋
（2017年、筆者撮影）

写真５．ジャララバード州出身の女性Ｂ氏が営むバザール
（2017年、筆者撮影）

【事例３】キルギス系の40代女性Ｃ氏、イシク・クル州出身

話者は７人きょうだいの末子で、現在、彼らのう

ち４人がイシク・クル州に、話者を含む残りの３人が首都とその近郊に住んでいる。約３年半前（2013年）に、話者の息子が故郷の学校を卒業したことを契機に、首都方面への移住を決めたという。ａ当初、話者は首都とその近郊に住んでいたきょうだいの自宅に同居しながら、ノヴァパクロフカの隣集落で衣料品関係の仕事について収入を得ていた。話者は首都近郊に移住した理由として、①首都の教育水準が高く、絵画・語学教室などの塾もあり、教育環境が整っていること、②故郷には仕事が少なく、子供の将来に希望を見いだせないこと、そして③首都の物価が安く、インフラ・サービスの質が良いことなどを挙げた。彼女の故郷にあるバザールでは、首都から運ばれた品々が販売されるが、これらには輸送費・手間賃などが加算されるため、値段は自ずと高くなり、家計を圧迫する。さらに高血圧の症状に悩む話者の母親の健康にとっても、標高が相対的に低いチュイ盆地は好ましい生活環境になっているという。ちなみに、話者の母親はチュイ州にある話者・兄・姉の自宅を順番に泊まり歩く生活を送っている。ｂ現在、話者はノヴァパクロフカの賃貸物件に住んでいるが、将来、この集落、あるいは隣集落の物件を購入し、定住したいと考えているという。彼女は近所に住んでいるドンガン系・ウイグル系の住民とも仲が良く、日常的な交流のほかに、祭り（トイ）などの際にお互いの家を訪問しあっている。

【事例４】キルギス系の39歳男性Ｄ氏、オシュ州出身

話者は６人きょうだいだが、話者のみがチュイ州に移住した。現在は話者自身と妻、そして５人の子供とともにノヴァパクロフカの自宅に住んでいる。ａ元々、彼はオシュ州にある実家で稲作と遊牧を行っていたが、その後、モスクワへ出稼ぎに行った。そこでは洗車や建築関係の仕事で所得を得ていたという。ｂ2007年に、話者はノヴァパクロフカで賃貸物件を借りた。この当時、話者は建築業の仕事についていたが、ウイグル系の知人の依頼を受けてスクラップの回収・販売、家畜の餌の販売などのビジネスも始めた。ｃこうして話者は経済力を蓄えるとノヴァパクロフカの物件（戸建て住宅）を購入した。そして、自宅前の仮設テントで夏にスイカやカボチャなどの青果を、冬に家畜の餌や石炭を販売するようになった。近い将来、石炭などの燃料を販売する店を開く予定だという。話者がノヴァパクロフカに移住してから約10年が経過したが、この間、集落の人口は増加し、その北・南側に家が相次いで建設され、道路の整備も進んだ。同じ集落に住む知人の中には「人が多くなりすぎた。もっと静かな場所に移住したい」と話す者もあり、話者自身も老後は故郷に戻りたいと願っている。ｄ話者によると、彼のきょうだいの子供や妻の親族たちが話者を頼って家・職探し、あるいは大学の入学準備のために同居することがしばしばある。彼らの平均的な同居期間は約３か月間と長期的だが、その間に、彼らはおおよその目的を達成する。なお、話者の近所にはウイグル系・ロシア系・ドンガン系が住んでいるが、日常的に仲良く交流しているという。

（ア）ロシアに出稼ぎに行く→ロシアから帰国→経済的な動機から、ビシュケクとその近郊に住む親族・友人を頼って上京→就職する、または何らかの小規模ビジネスを開始する→ある程度の経済的余裕が生じると、「静かで広い地域（＝ノヴァパクロフカ）」の土地・住宅を購入→そこに親族が長期間同居し、近隣集落（同一集落内ではない）に定着。
（イ）（ア）の下線部の動きを伴わないもの（国内での移住のみ）。

【資料１】ノヴァパクロフカにおける人口流入のパターン（ソ連崩壊以降）

事例１～４から、ノヴァパクロフカでは次の段階を経て都市化が進展したことがわかる。すなわち、旧ソ連時代から21世紀初頭にかけてのノヴァパクロフカにはキルギス系はほとんど住んでおらず、ロシア系・ドイツ系の人口が卓越していた（事例1a、事例2e）。また21世紀初頭まで、この地には商店もほとんど存在せず、野原が広がる閑散とした地域であった（事例1c、事例2d）。1991年のソ連崩壊を契機にノヴァパクロフカのロシア系・ドイツ系が相次いで母国に帰還すると、彼ら／彼女たちの住居が貸出・販売されるようになった（事例1d、写真６）。ロシア系・ドイツ系の転出によってノヴァパクロフカの人口は減少したが、そこに国内の他地域からキルギス系が流入してきた（事例1b）。彼らの中には、かつてロシアまで出稼ぎに行ったが、その気候や居

写真６．売家であることを示す看板
（2017 年、筆者撮影）
写真中の看板のぼかしの部分には、売却の交渉にあたる人物の電話番号が記されている。

住環境が好ましくないなどの理由で帰国し、ノヴァパクロフカに身を寄せた者もある（事例 2a、事例 4a）。これらの新たな移住者たちは賃貸物件に入居する、自宅を建設する、小規模ビジネスを始める、あるいは周辺地域で職を得るなどして同集落に溶け込み（事例 2c、事例 3b、事例 4b･c、写真５参照）、2005～2017年の間にその人口を 127.5％も増加させた[16]。ノヴァパクロフカの人口が急増した要因として、同集落を含むイシクアタ地域が、首都とその周辺の中で最も経済活動が活発な点―チュイ州内において最低の失業率を誇ること―を指摘できる。なお、2009年の統計によると、同集落への移住者の 39％が商業、または車両・家庭用品の修理業に、26％が建築業に、８％が製造業に従事している[17]。

さらに事例２～４より、話者たちが首都近郊に先に定着していた知人・親戚を頼って上京し、後に経済的に安定して自宅を構えるようになると、今度は話者たちを頼って、彼ら／彼女たちの親族が相次いで上京するという人口の流れが生じている点も確認できる（事例 2b・f、事例 3a、事例 4d、資料 1）。ここで、キルギス系が親族間での集住を志向する伝統を有するにも関わらず、首都とその近郊に新居を構える際には「地価の高さ」という経済的な制約の影響を受け、自身と親族の自宅を 10㎞単位で分離させている事実に留意したい[18]。ノヴァパクロフカ在住の親族を頼って上京してきた「一時的な転入者たち」は地価や住居費が高騰するビシュケクではなく、これらの費用を安価に抑えられる首都近郊に飛び石的に自宅を構え、都市化を促しているのである。

先述のように、ビシュケクとその近郊では大勢のキルギス系の流入によって都市化が著しく進展しているが、ロシア系の住民にとって、この動向は幾ばくかの脅威を感じるものになっている。ノヴァパクロフカ出身のロシア系の 50代男性Ｅ氏（ノヴァパクロフカ在住）は、「地元では生活できないという理由で、国内の他地域からノヴァパクロフカとその周辺にキルギス系が大勢住み着くようになり、集落が拡大した。人口が倍増したように感じる。自分にとって、ソ連時代の方が住みやすかった」と話す。彼の言葉から、かつてノヴァパクロフカで多数派であったロシア系が、押し寄せるキルギス系の人口の波に幾ばくかの圧迫感を感じていることが垣間みえる。また､オシュ州出身のＤ氏（事例４）は「ノヴァパクロフカに移住してから約10年が経過したが、この間、集落の人口は増加し、その北・南側に家が相次いで建ち、道路の整備も進んだ」と地元の変化について述べるとともに、友人との間で「人が多くなりすぎた。もっと静かな場所に移住したい」という会話が交わされたことや、彼自身も最終的には「都会暮らし」をやめて故郷に戻りたいと考えていることを語った。

このように、ノヴァパクロフカはビシュケクに隣接するという立地にあるがゆえに、ソ連崩壊以降、ビシュケクと機能・景観を一体化させるまでに発展した。しかし、人口が急増した現在のノヴァパクロフカに対し、「新旧の住民」の中には否定的な評価を与える者も現れ、「住みにくい空間」としての性質をもそなえるようになった。

Ⅱ．農村における都市化の進展

１．イワノフカステーションにおける緩やかな都市化

筆者は先章において、多くのキルギス系が親族・知人との人脈を活用して首都近郊に次々と移住し、ノヴァパクロフカを含む首都近郊の都市化に拍車をかけている様子を浮き彫りにした。次に筆者は、首都から東に約40㎞の地点に位置するイワノフカ（人口 16,911人、2018年）の南部においてもノヴァパクロフカと同様に聞き取り調査を行い、農村においてどのように都市化が進展しているか解明を試みた[19]。

イワノフカは南北に約 4㎞離れた２つの家屋群からなる集落である。その北側の家屋群は、幹線道路沿いに多数の商店が東西方向に軒を連ねる路村の形

写真７．イワノフカステーションの民家と畑
（2018年、筆者撮影）

写真８．イワノフカ駅（2018年、筆者撮影）

態をしており、ノヴァパクロフカと同様に都市的な性質をそなえた地域となっている（以下、この地域を「北部」と呼ぶ）。これに対し、イワノフカの南側の家屋群はビシュケクとイシク・クル州とを結ぶ鉄道の駅を備えているものの、その周囲には畑地が一面に広がっており、農村としての性質が強い地域となっている（以下、この地域を「イワノフカステーション」と記す。写真７・８）[20]。筆者がイワノフカステーションの住民に聞き取り調査を行った結果、国内の他地域から大勢のキルギス系がイワノフカステーションに流入しているが、都市化の速度はノヴァパクロフカよりも緩やかであることがわかった。事例５・６は、イワノフカステーションで実施した聞き取り調査の概要をまとめたものである。

【事例５】キルギス系の23歳男性Ｆ氏、キルギス系の20歳男性Ｇ氏、16歳男性Ｈ氏（民族系統不明）

３名の話者はいずれも、イワノフカステーションで成長した。彼らのうちＦ氏とＨ氏の親と親戚が、現在、鉄道関係の職を得ている、あるいは、かつて得ていた。ａ近年、この集落で鉄道関係の職に就いている者は少数である。Ｈ氏によると、彼の両親はカント（ビシュケクから東に約20㎞の地点に位置する町）に移住し、そこで働いているという。ｂ話者たちによると、最近、オシュ州・バトケン州出身のキルギス系がイワノフカステーションに多数移住している。彼らはこの集落で家屋を新たに建てることはせず、土地と中古住宅を購入する傾向にあるという。話者たちはこれらの移住者によって、イワノフカステーションの人口が増加していると感じている。ｃこのような人口の流れがみられる一方で、彼らの友人たちはロシア・カザフスタン・韓国・日本などへ転出した。ｄ話者たちはこの人口の動きを「まるでビリヤードのようだ」と表現する。ｅ３名の話者たちはいずれも「都会志向」である。それは、ビシュケクに「将来、進学するであろう大学や就職先」が存在すると考えているからである。現在、イワノフカステーションにはほとんど仕事がなく、この集落の若者のうち12％のみが専門的な職業を得ているに過ぎない。近年、イワノフカステーションに中国資本の電気機械関連の工場（その前身はソーセージの製造工場であった）が進出した影響で、中国系の人口も増加している。話者たちは、今後、同集落においてこの傾向がより強まるだろうと予測している。

【事例６】キルギス系の64歳男性Ｉ氏（チュイ州カラバルタ出身、元建築技師・元鉄道職員）、ロシア系の37歳女性Ｊ氏（旧ソ連ペルミ地方ベレズニキ出身、Ｉ氏の息子の妻）

1955年、Ｉ氏はナリン州コチコル出身の両親のもと、チュイ州カラバルタ（ビシュケクから西に約60㎞の地点にある町）で生まれた。その後、ナリン州ミンシュクで社会人を経験してから、カザフスタン南部のアルマトイの大学に入学し、そこで建築学を専攻した。卒業後、約22年間にわたってロシアで生活を送ったが、その間にモスクワオリンピックや原子力発電所関連の施設の設計に関わった。ａＩ氏は1988年にイワノフカステーションに移住した。当時、この集落の人口の大部分がドイツ系で占められ、彼ら以外にはロシア系が10世帯ほど、同じくキルギス系が約５～６世帯住んでいただけだった。Ｉ氏によると、1957年に鉄道がイワノフカに敷設された。彼

はこの地に移住してから２年間、鉄道員として働いた。Ｉ氏の息子の妻であるＪ氏は、親族がイワノフカに居住していた関係で、両親とともに旧ソ連のペルミ地方からこの地へ移住し、イワノフカステーション生まれの夫（現在、ビシュケクで働いている）と結婚した。Ｉ氏によると、1990年頃まで、イワノフカステーションにはレンガなどの製造工場があり、そこで約5,000人もの労働者が作業をしていた。また、その当時、同集落には6,000台の機械の修理が可能な工場も存在しており、仕事は豊富にあった。ｂＩ氏は「最近、イワノフカステーションの人口の約半数がロシアなどへ出稼ぎに行っている」と話す。ｃまた、これらの転出者が残した多くの空き家に、オシュ州・ジャララバード州出身のキルギス系が住むようになったという。なお、2010年代に韓国系の大学がイワノフカステーションの近所に創設され、さらに中国資本の工場が進出したこと（事例５参照）から、同集落では中国・韓国をルーツとする住民が増加している。ｄソ連崩壊を契機に母国へ帰還したドイツ系・ロシア系の元住民の中には、物価の安さ・生活のしやすさからキルギスに戻る者もあるが、その数はわずかだという。ｅＩ氏は、キルギス系を中心とした転入者の影響で集落の人口は全体的に増加しているが、住宅地の面積はほとんど変化していないと話す。ｆＩ氏はこの人口の流れを「まるでビリヤードのようだ」と評する。ｇ旧ソ連出身のＪ氏は、今後、この地からビシュケクなどへ移住する予定はないと述べ、その理由として、首都の物価・物件・地価の高さを挙げた。彼女の友人の幾人かは首都の自宅を売却し、生活費を安価に抑えることができるイワノフカステーションへ移住したという。

事例５・６から、イワノフカステーションにおける人口の流れと都市化の進展に関して、次の点が把握できるであろう。1980年代のイワノフカステーションではロシア系とドイツ系の人口が卓越していたが、ソ連崩壊により彼らが母国に帰還し、その人口は減少した（事例6a・d）。これと並行して、同集落の青年層・中年層が就職や進学を契機に、国内ではビシュケクやカントなどの近隣の都市・町へ、また国外ではロシア・カザフスタン・日本などへ積極的に転出した（事例5a・c・e、事例6b）。こうしてイワノフカステーションではロシア系・ドイツ系のみならず、青年層・中年層が相次いで流出したために、多数の空き家が生じた。その後、転出者の数を凌駕するキルギスの南部出身者がイワノフカステーションの空き家に住み始めたことで、まるで「ビリヤードのような人口の流れ」が生じた（事例5b・d、事例6c・f）。これらの南部出身者たちは、イワノフカステーションで新居を建設せずに中古住宅を購入する傾向にあるため、同集落の人口は増加しているものの、集落の面積は何ら変化していない。したがって、イワノフカステーションは首都近郊のノヴァパクロフカに比べ、都市化の進展のスピードが相対的に緩やかだと言えよう（事例6e）。さらに事例6gにみられるように、一旦は首都に定着したものの、ビシュケクの物価や住居費の高さに辟易した人々が、生活費を抑える目的で首都からやや遠方の集落に再度転居するという興味深いケースも確認できた。

1991年のソ連崩壊を契機に、多数のキルギス系が首都ビシュケク近郊在住の親族・友人を頼って「芋づる式」に上京を果たした。そして、彼らの中で高い経済力をそなえた者は首都近郊に自宅や店舗を新たに構えることで、移住先となった地域の民族構成を変え、また都市化の進展に拍車をかけた。その一方で、首都から比較的遠方に位置する農村では、経済力の低い南部出身のキルギス系が中古住宅に入居し、人口を増加させるにとどまっている。このように、チュイ州北部では首都からの距離と都市化の速度に関して負の相関関係が確認できた。ところが、筆者が首都から東に約75㎞離れた場所に位置するドンガン系の農村を調査したところ、近年、これがその面積を急速に拡大させていることが浮き彫りとなった。次章では、ドンガン系がいかにして自集落を拡大させたかについて報告を行う。

Ⅲ．ドンガン系による農村集落の急速な拡大

キルギス在住のドンガン系は、1860年代に清朝に抵抗して「独立汗国」の創設を図った廉で迫害され、中央アジアへ逃れてきた人々を先祖とする（コラーズ：1956）。コラーズ（1956）は彼らを「アラビア人とペルシャ人の混血に発し、回教信仰を誇示しているが中国語を採用しており……中国西域の人種」だと定義する。ドンガン系は甘粛方言をもとにした漢語、ロシア語、そしてキルギス語を日常的に用いるが、彼らの語彙の中にはアラビア語・ペルシア語・

トルコ語からの借用語も含まれる。

キルギスのドンガン系はキルギスとカザフスタンの国境地域―すなわち、首都近郊のソークルーク（ビシュケクから西に約20㎞離れた地点にある町）からカラコル（イシク・クル州）にかけての範囲―に定着し、他民族との混住を避けて独自の生活様式を保持してきた（図１・５）。本稿の「はじめに」で述べたように、キルギスにおいてドンガン系が占める人口の割合は1.1％と極めて低い。そのため、彼らは人口を急増させる、あるいは集落を拡大させる―都市化を進展させる―存在として認識されにくい。だが今日、ドンガン系はキルギス系よりも経済的に安定しており（後述）、なおかつ、高い合計特殊出生率を誇ることから（「はじめに」参照）、今後、ドンガン系はキルギスにおいて政治・経済的な影響力を強め、また、都市化を促進させる存在になるものと考えられる。以上を受けて、筆者はチュイ州内のドンガン系の集落のひとつであるイスクラ村において、同村の村長Ｋ氏、ならびに、彼の親族の男性を対象に村の産業、村人の転出・転入と家屋の建設状況について聞き取り調査を実施し、ドンガン系が自集落をどのように急速に拡大させているか解明を試みた（写真９）。

イスクラ村はビシュケクから東に約75㎞の地点に位置する人口2,957人（2017年）の農村である（図５、写真10）[21]。この村の住民の約８割がドンガン系で占められ、残りの２割がロシア系・キルギス系・ウイグル系の住民となっている。話者の父Ｌ氏はカザフスタン出身で、Ｋ氏が誕生した頃（1955～56年頃）にイスクラ村の村長になった。当時、Ｌ氏はこの土地をドンガン系に積極的に分配し、彼らの定着を奨励した。1950年代半ばにＬ氏がこのようなむらづくりを進めたのは、当時のイスクラ村ではコーカサス系（カラチャイ系・チェチェン系）の人口が圧倒的に多く、ドンガン系の住民が極めて少数であったからだという（Ｋ氏による）[22]。

現在のイスクラ村では、大部分の世帯が畑作と遊牧の両方を生業としている。Ｋ氏によると、１世帯あたり４～5haの畑を所有し（写真11）、世帯ごとにジャガイモ・キャベツ・タマネギ・ニンニク・ダイズ・トウモロコシなどの作付けを行っている。農作物の収穫期になると卸売業者が同村を訪問し、これらを買い取る。ニンニクとジャガイモの約90％がロシア（モスクワ）とカザフスタンに輸出され、それ以外は村人が自給用として消費したり、トクマクやビシュケクのバザールで販売したりする（写真12）。畑仕事の人手が不足した世帯では、村内の求職中の者に声がけをする。その際に、依頼主側では

写真10．イスクラ村の景観（2018年、筆者撮影）

写真９．話者Ｋ氏と家族・親族（2018年、筆者撮影）
Ｋ氏は左から４番目の乳児を抱いた男性。

写真11．イスクラ村にあるＫ氏所有の農地
（2018年、筆者撮影）

「安心して雇用できる人物」―つまり「親戚筋で、良く見知った者」―に仕事を斡旋する。

ドンガン系の先祖たちは代々、中国や中央アジアで畑作をおもな生業としてきた。そのため、キルギス国内において、ドンガン系は遊牧民であるキルギス系よりも優れた耕作技術をもつという社会的評価を得ている（キルギス系の研究者、ドンガン系の住民に対する聞き取り調査による）[23]。ソ連が崩壊して資本主義経済が導入されると、ドンガン系は「畑仕事が苦手なキルギス系」から土地を購入し、広大な農地で作物を栽培する、あるいは自身のルーツである中国から農業技術・農機具をいち早く導入するなどして、農業の経営規模の拡大と合理化を図り、経済力を高めた。その様子は、イスクラ村の人々が促成栽培用のビニールハウスや農業機械を積極的に使用している点からも確認できる（写真13）[24]。

毎年５月になると、イスクラ村では３～４名の村人に全世帯の家畜の世話を託す。彼らによってウシ以外の家畜が集落から南に約7㎞離れた遊牧地へと移される[25]。この村の人々が、高温・乾燥が厳しい夏季にウシを敢えて集落に残すのはなぜか。それは、近年、イスクラ村の近隣に牛乳･チーズなどを製造･販売する牛乳工場が進出し、住民たちがそこに生乳を出荷するようになったためである。K氏によると、毎朝６時に収集車が村内を巡回して生乳を集め、これを工場まで搬入しており、毎週末、牛乳工場から各農家に生乳の代金が支払われる仕組みになっているという。そして９月に入ると、遊牧地の家畜はすべてイスクラ村へと戻される。イスクラ村の住民たちは、遊牧地の雪解け水と牧草で程よく肥えた家畜をバザールなどで販売し､現金収入を得るのである。

K氏によると、イスクラ村の住民が結婚以外の理由で他地域に永住するケースは稀だという。K氏はその理由を、「この村が農業で経済的に潤っており、村人にとって生活がしやすい環境になっているからだ」と説明する。実際に、キルギス国内のドンガン系が卓越する集落の周辺では、ビシュケク・トクマク・ノヴァパクロフカ・カントなどの都市・町とは異なり、日雇いの仕事を求めて路上に屯する男性たちの姿はみられない。K氏は「かつては都市の住民たちの方が経済的に豊かだったが、今は、この村と都市とではそれ程の差はない」と述べる。近年のイスクラ村のドンガン系の経済力の高まりは、各世帯の自動車の所有状況からも把握できる。すなわち、2000年頃までは各世帯の自動車の保有台数は１台だけだったが、近年は、冠婚葬祭用の高級車と日常的に使用する自動車の２台を所有するようになった。また、K氏の自宅にはドラム式の洗濯機などの大型家電が多数あり、ドンガン系が経済的に豊かな生活を送っている様子がうかがえる。

イスクラ村の住民の中には、進学や就職などを契機にビシュケクへ移住する者もあるが、彼ら／彼女たちの大部分は最終的に帰村する。たとえば、K氏の弟M氏は５～６年前に首都に移住したが、「周囲が見知らぬ人ばかりで、あまり話ができない」という理由で２年前に帰村した。また、同じく兄N氏は現在ビシュケク在住だが、イスクラ村に土地を所有している関係から、「数年後には村に戻って生活をしたい」と考えているという。K氏は、ドンガン系が故郷に回帰するのは「彼らが、村自体を大きな

写真12. トクマクのバザール（2018年、筆者撮影）

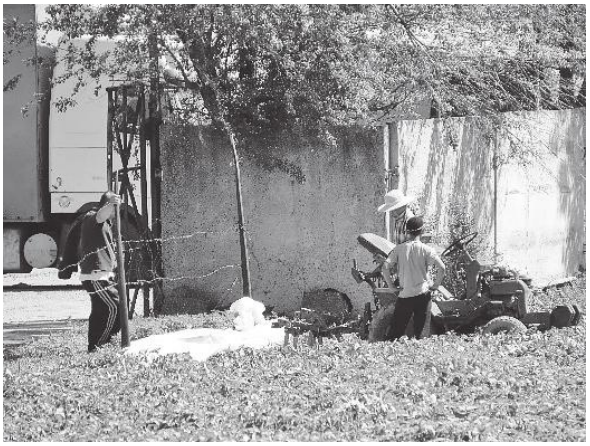
写真13. イスクラ村の農作業の様子
（2018年、筆者撮影）

家族だと認識しているからだ」と述べる。

キルギスのイスラム教徒は、子供の誕生を「リスクや負担を生じさせる出来事」としてではなく、「人生の支えになる喜ばしい出来事」として捉える。イスクラ村のドンガン系もこれと同様の認識をもっており、さらに「子供は多ければ多い程、幸せになる」と考える傾向にある。そのため、ドンガン系の女性たちの間では、10代後半での結婚・出産は決して珍しいことではない（写真14・15）[26]。イスクラ村の住民たちがこのような家族観をもつがゆえに、同村では人口の増加や家屋の急増といった現象がみられる。たとえば、2018年５月時点でイスクラ村の村境に広大な空き地があったが、筆者はそこで多数の建築中の家屋を確認することができた（図６、写真16）。Ｋ氏によると、近い将来、この空き地に村の男性たちの手で50軒もの新しい家屋―おもにドンガン系の世帯が入居予定のもの―が建設される予定だという[27]。

以上がイスクラ村における現地調査の結果の概要となるが、その内容から以下の３つの事実を導くことができるであろう。まず第１点目は、ソ連崩壊を契機に、ドンガン系が土地所有に高い関心をもつようになり、キルギス系から農地を買い取り、農業の大規模経営を図ったことである。次に、彼らが自身のルーツである中国から得た農業関連の情報や技術をもとに、自集落において輸出を意識した合理的な

写真14. ドンガン系の若い花嫁（2018年、筆者撮影）
結婚式の直前で緊張している若いドンガン系の花嫁。

写真15. ドンガン系の３世代家族
（2018年、筆者撮影）
前列右側の男性が話者のＫ氏。Ｋ氏は７人きょうだいの末子で、自身は７人の娘をもつ。キルギスでは男系による末子相続が一般的で、現段階において、Ｋ氏の最も幼い孫（写真前列左）が彼の家督を継ぐ予定になっている。

写真16. イスクラ村境で建築中の家屋
（2018年、筆者撮影）

畑作を行い、多額の現金収入を得る仕組みを構築していたことを第２点目として掲げたい。そして第３点目は、ドンガン系がこれまで営んできた伝統的な農耕・遊牧に従事するのみならず、牛乳工場の近隣地域への進出を契機に酪農分野にも積極的に参入し始めた点である。これらを合わせて考えると、資本主義経済の導入にともない、イスクラ村のドンガン系は農業経営の大規模化・合理化・多角化を図り、村内で現金収入と仕事を安定的に得られる体制を構築したと結論できる。

イスクラ村から一度転出したドンガン系にとっ

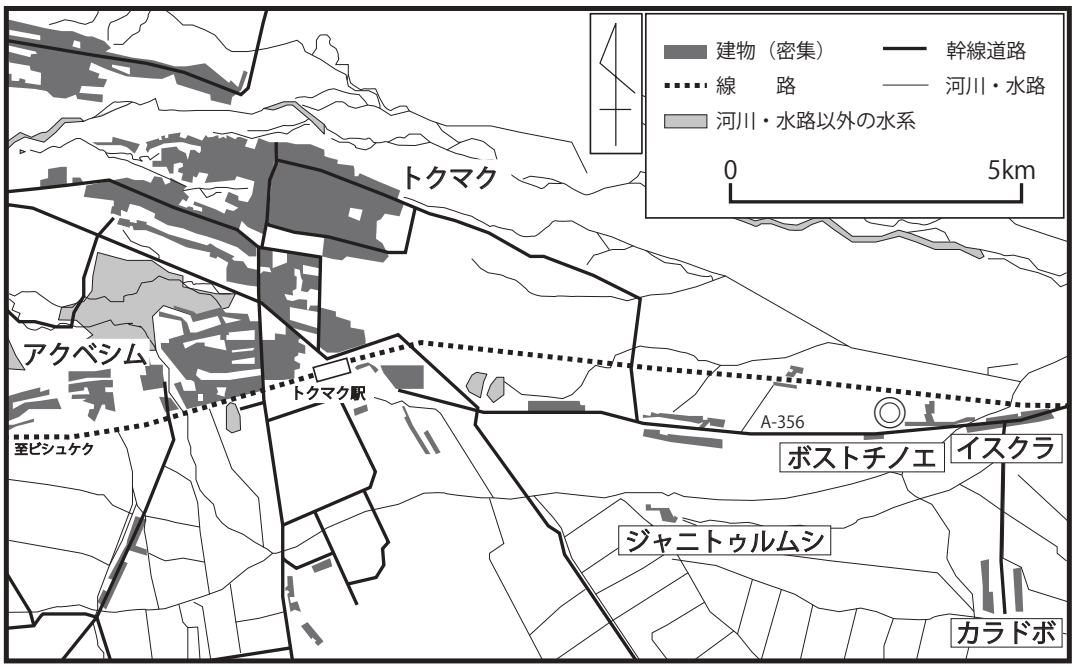

図６．イスクラ村の位置（2018年）（1986年発行の10万分の１地形図「トクマク」をもとに作成）
注）イスクラ村は、□で囲んだ４つの家屋群からなる。写真16は本図の◎地点で撮影したものである。

て、このような仕組みをもつ故郷への帰村は、経済・雇用面での安定性の獲得と文化的なストレスからの脱却を意味するものとなった。そして、彼ら／彼女たちを含むドンガン系は比較的早い年齢での婚姻・出産を通じて地域の人口と家屋を増加させ、首都から遠く離れた農村であっても、集落の規模を急速に拡大させるに至ったのである。

おわりに

本稿では、キルギスの首都ビシュケクを擁するチュイ州で実施した現地調査の成果をふまえ、1930年代以降の同地域の郊外・農村における集落の拡大―都市化―の過程とその特徴について報告を行った。しかしながら、本研究ではキルギス国内最大の民族集団であるキルギス系―「土地を手放した民族集団」―が、経済力を高めつつある少数派のドンガン系―「土地を買い集め、これをもとに集約的・合理的・多角的な農業経営を展開する民族集団」―といかなる社会的関係にあるかについて解明するまでには至らなかった。上記の点を今後の研究課題として掲げ、本稿を終えることとしたい。

謝辞

本研究は、公益財団法人平山郁夫シルクロード美術館の「海外調査助成」（「シルクロードの諸都市・集落の形成・拡大に関する歴史地理学的研究―キルギスを事例として」、研究代表者：筒井　裕）を用いて実施したものである。キルギスでの現地調査の折には、Bakyt Amanbaeva 先生をはじめとするキルギス国立科学アカデミーの諸先生方、ならびに、通訳の Omurbek Zhanakeev 氏とそのご家族の皆様、ノヴァパクロフカ、イワノフカステーション、イスクラの皆様、そして帝京大学文化財研究所の山内和也教授から多大なるご協力を賜った。また、英語表現について茨城大学の大島規江先生からご助言をいただいた。以上の皆様に厚く御礼申し上げます。

註

1）National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic ed.（2017）による。以下、断りがない限り、「キルギス共和国」を「キルギス」と記載する。

2）以上のキルギスの歴史的経緯に関しては、ジュリボイ・エルタザロフ著・藤家洋昭監訳（2010）が詳しい。

3）吉田はナリン州の農村で現地調査を実施し、ソ連崩壊前後のキルギス系の生活の変化について詳細に報告している（吉田 2004、2012a・b、2018）。たとえば吉田（2012b・2018）は、資本主義経済の導入にともない、農村のキル

ギス系が土地所有・商業活動などをめぐって親族関係を悪化させたと論じている。

4）ソ連崩壊以降、キルギスでは10年に１度の頻度で国勢調査を実施している。最近では2018年に行われた。本稿では、可能な限り最新の統計資料を使用するように努めた。

5）National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic の HP 掲載の統計資料による。

6）キルギス系のイスラム教徒の中には、アルコール類や豚肉を含むソーセージなどを口にする者もある（現地での聞き取り調査、観察調査による）。また、キルギス系のみならず、比較的厳格な戒律のもとで生活を送っているとされるドンガン系であっても、冠婚葬祭などの折には携帯電話のカメラ機能を使用して親族・友人・知人たちと積極的に記念写真を撮影する。これらの事実から、チュイ州北部のイスラム教徒たちは、イスラム教の教えに対して非常に柔軟な姿勢をもつと言えよう。

7）National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic ed.（2009）による。

8）前掲７）による。

9）チュイ州北部に位置するビシュケクとその周辺地域は地中海性気候に属す。夏季になると昼間の気温が 40℃近くにまで上昇し、さらに雨がほとんど降らないため、非常に乾燥する。ただし、夜間は 15℃程度まで気温が下がり、比較的過ごしやすくなる。

10）前掲５）による。

11）本研究に係る現地調査を、2016～2018年度に断続的に実施した。

12）元来、キルギスの首都名は「ビシュケク」であったが、1926 年にロシア系の共産主義指導者ミハイル・フルンゼに因んで「フルンゼ」に変更された（コラーズ編：1956）。その後、1991年に再度、旧名「ビシュケク」を使用するようになった。

13）キルギスでは経済力のある者は業者に新居の建築を依頼するが、通常は、建築主自らがこれを行う。まず、建築主は事前に新居の敷地内に小屋を建設する。そして、そこに寝泊まりをしながら、レンガなどを用いて新居を建設するという（現地での聞き取り調査による）。

14）キルギス統計局提供の資料による（2018年購入）。

15）都市化の影響で、2017年現在のノヴァパクロフカでは様々な民族が混住した状態にあるが、事例１～４のいずれの話者も「お互いのルーツをあまり気にせずに日常的に交流している」と話す。

16）前掲14）による。

17）前掲７）による。

18）一般に、首都近郊に移住したキルギス系は、冠婚葬祭や祭りなどの折に自宅と親戚宅までの間を自動車で往来する。そのため、両者間の距離が 10～20㎞程度の場合、移動はあまり苦にならないという（現地での聞き取り調査による）。

19）キルギス統計局提供資料による（2018年購入）。なお、2005年当時のイワノフカの人口は 15,335 人であった。よって、2018年時点で人口が1,576人増加したことになる。

20）毎日、上下２本ずつ電車が運行されている。イワノフカステーションの住民の中には、電車を利用してビシュケクなどに赴く者もある。

21）キルギス統計局提供のデータによる（2018年購入）。2005 年当時のイスクラ村の人口は 2,598人である。したがって、小規模の村であるにも関わらず、約10年間で人口が350人増加したことになる。

22）Ｋ氏によると、イスクラ村のコーカサス系はすべて母国に帰還したため、2018年現在、同村のコーカサス系の人口は０人だという。

23）調査時に、Ｋ氏はドンガン系がもつ畑作に関する知識と技術について、「これは先祖からの贈り物だ」と誇らし気に語った。

24）キルギス系が畑作時に農業機械やビニールハウスを使用することは稀である。

25）前掲９）で述べたように、チュイ州北部の盆地では夏季の高温・乾燥が家畜の飼育に適さないため、住民たちは家畜を冷涼な山間部の遊牧地へ一時的に移動させる。遊牧地には雪解け水と新鮮な牧草が豊富にあることから、住民の中にはそこを「家畜たちの天国だ」と表現する者もある。

26）一般に、キルギスの女性の初婚年齢は25歳程度で、これを過ぎた独身女性は、コミュニティの中で「いきおくれ」とみなされ、女性としての社会的立場が弱くなる（現地での聞き取り調査による）。

27）イスクラ村には、ロシアやカザフスタンで建築技術を学んだ男性たちが居住しており、彼らは３つの建築集団を組織している。

［参考文献・統計資料］

ウォルター・コラーズ著・小野武雄訳（1951）：『ソヴェート民族史』国際文化研究所.

ジュリボイ・エルタザロフ著・藤家洋昭監訳（2010）：『ソヴィエト後の中央アジア』大阪大学出版会.

中島隆晴（2010）：「最近のキルギス・東トルキスタン情勢」『日本戦略研究フォーラム季報』46，pp.38-41.

早瀬保子・小島　宏編（2013）：『世界の宗教と人口』原書房.

堀江典生編（2010）：『現代中央アジア・ロシア移民論』ミネルヴァ書房.

吉田世津子（2004）：『中央アジア農村の親族ネットワーク』風響社.

吉田世津子（2012a）：「旧ソ連領中央アジア・北部クルグス農村における世帯形成とキョウダイ」『共存の論理と倫理』はる書房，pp.73-95.

吉田世津子（2012b）：「現代中央アジア農村の商売と親族―北クルグスタンの事例から―」『ユーラシア世界４　公

共圏と親密圏』東京大学出版会，pp.217-240.
吉田世津子（2018）:「経済変動のなかの家族・親族」『現代中央アジア　政治・経済・社会』日本評論社，pp.185-207.
Department of the Army ed. (1958): Soviet Topographic Map Symbols TM30-548 Department of the Army Technical Manual. Washington.
Department of the Main Computing Center of the National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic, ed. (2014): Social Trends of the Kyrgyz Republic 2008-2012. Bishkek.
M.Dyldav (2017): Urbanization　Processes in the Kyrgyz Republic. Case Study: the City of Bishkek. Studia UBB Geographia 52-1, pp77-85.
Martin Schuler (2007): Migration Patterns of the Population in Kyrgyzstan. Espace, Popula-tions, Societies 1, pp73-89.
National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic ed. (2009): Population and Housing Census of the Kyrgyz Republic of 2009 Book Ⅲ (in tables) Regions of Kyrgyzstan Chui Oblast Bishkek.
National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic ed. (2017):Kyrgyzstan Brief Statistical Handbook.
National Statistical Committee of the Kyrgyz Republic　HP (Total population by nationality：assessment at the beginning of the year, people).
Отдел подготовки данных демографической статистики（キルギス統計局提供の資料）.